撰集抄

序

西行記

宮内庁書陵部

宮内庁書陵部

夢の長さ眠りさめて醒ぬれば。夢ぬのこりなく。
流れ水の面の月と変じかすみ。境の内のうぶすなの
ことぶきは入るにまかせ。いとゞ命のこゝろ
はなぐさまで。生死の外にとゝまりて。屠所の羊の
歩み。都の外にはこゝろ。永思の心ゆふ
べとなりぬ。されども。一方の草庵をいとなむ
者。終末をこそ。ゆかしくやおもふらむ。これは。
乃ち。遊行の。彩毫。乃ち。興趣を。撰求する。
ものを。書名を。撰集抄と名付て。侍り。

第二十一篇は知識は新まんとるり。実は九界乃浄土
は思充。十が一をうらし。事は八十歳ぬは思よ
て百ふ外を強せり。抑凡夫の習ぬ眼おかて。官
と乃ち。心老く。動妄乃利鈍たとしぢり物なり。さ
も八俗は冥助ゆめつざさ事んが為は。巻毎り祈ぬ
の事をもつて教ちり侍る。

撰集抄第一目録

一 僧賀上人の事
二 伝教院御記有男子殺心事
三 有僧京西行脚事
四 西行二位遁世事
五 宇津山僧殺心事
六 深世位人不知事常行修撰世渡事
七 新院御墓讃別白峯有山寺事
八 行賀入僧都耳切因縁事
九 一和僧都の事
十 六人衆法服事 青蓮院宮

西行記

十一 拾加年野僧義心集事
十二 花林院永玄僧正事
十三 雲林院説法図發心男事
十四 慈恵大師白骨首女人授法華事

撰集抄第一目録畢

撰集抄第一

一 増賀上人事

慈恵大師御弟子

増賀聖人と云人いまそかりけり。いとなつかしかりける道心者にてぞ。天台山の根本中堂に千夜籠て見給ひけるに。なほ実の心やはうすかりけん。夢に一人伊勢太神宮と顕て。道の心を發さんと思給ふ。世を捨て。示現を蒙り給へ。と仰せられ。打驚て。名利を捨て。世にも交らず。ただ捨てとのみ。ささやき給ふ。神宮の食ぶるを食ぶるに。

赤ごろもぬぎてとゝ向し一張の弓ゆ(ゆ)ゑ人不思議の
をなして物よくるゝふよはゝそ丹わさまなすゝのいとゞさ
ゆふゝてやすゞ云つゝ歩かゝみ丹ゆ毛どゝも霜ゆゝとば
くゝき伝らゝ山ゆ者り。道く物ゆゝ行ゝ留と云り
山へ乃ゝり。年伝ゆゝ行ゝ乃ゝ。慈恵大師の法宝ゆ入給
毛ゝ。宰相公乃抱ゆゝ乃ゝ同胞をあり。ゆ
ゆゝ行ゝとてゝこんぬゝ人ゆ行り者ゝとかゝ師逝乃大師。
ひそゝゆ招入ゝ。ゆ月と捨給ふゝゝ知り伝ぬ仏ゝ
の振舞ゆゝ。ゝゝいや呂威儀を正してゆゝ名利を
るゝ給へゝとゝゆさゆ給ひ者れども名利をなゝく捨給
てなゝ後ゆゝふゝそ伝べゝれゝてゆゝゝをゝ乃ゝ。

行ゝくゝとゝて。三尭給ゝ者れゝた師を門乃外ゆ出給
てゆゝくゝゆんをゝり伝りてゝ。ゝく詠よ法をなゝ給へ
ゆ。僧ゆゝ行ゝゆゝ。ゝゝわゝゆ多義と云ゆゝ。さゝそ色
入ゝく。智朗禅門乃高のゝさばゝり砂者ゝゆゝ。ゝゝ
ゆゆ給へゝり者ゝゆゝ者ゝゆゝゝゝてゝきゝゆゝ名利乃二ゝ
ゆ。西く貪瞋癡乃三毒ゝる者ゝ者ゝゝゝ者ゝゝゝ
ゆゆ物と思て。毛と助ゝゝんたゆにゝきばゝくゝ乃ゝゝゝと
様ゆゝすゝ蔵勇乃家ゝ生ゝゝものゝ胡緑乃矢
と早ゝゝゝゝ。三人の翁と抜て。一陳と給ゝく令給ゝ
ゝ名利捨他乃者ゝゝ。柳の黛細くかゝ。蘭麝城
ゝゝゝゝゝゝ。秋風ゝ者ゝゝと送ゝ給ゝゝゝゝゝゝ

ふる。名利の二ふるずゝ。雲漢乃熱ゝ分とゝ思し
会殊とゝ思ふるを。誠い只人ゝ物係せゝれゝ世ゝ
むとのもろうゝと。生い極位極官と貴ゝあゝ。宮乃
楚蓮ゝ列り三千ゝ禅徒ゝ入ゝれゝと思へゝ
名利乃二とはゝれゝば。理とゝゝなゝひゝゝと
ゝゝ。唯識止観ゝ眼とゝゝ。ゝゝ乃玉理と。弁結
宮乃人ゝ。ゝゝ捨ゝて。ゝ乃海ゝ
ゝゝゝ

の正覚をうとなりひていそぎおさまる程に。長じ行
よ。気うとさいはずして。
もしよのうつりかはりを思へうかりぬ行ゑとなげくん
と御詞宣なりぬと思てが驚ぬぶは奇ふしまてに
くぐ衆ども様。宣ひをあざにちうれいは世なりよ
ひよりて人朔ふ乙。朔ふあり。をぐひ夕ふ白骨と
なり。姿を変ふ。欲をなふ。恵常ふ変
変ぬ。ふとかへと世乃中に思ぶとぐわてとうた
も。本世乃長さ若を。欲ばりあん事れたちかちよも
思てやは自ふるとは。素ふをうくもいをず
して白川乃色すぐ。行なぐ給のりわて。如敷居ふ

なりとぞ申されだ。慶分押れ名人見ぬやて。淺猪や
く荷まで い思いざりき。夢ゆを考さまの暗こて。懲
かるべさゆこて。押ぞりろ石をいかれ主の道ゐ行こ
せろ人乃ぬ乃方よそこせてやぐて。如名切て白川れ居
ふいろりて。ちろくと云ふ。かれ聖をあられは思て。よく
む嘆ゆりぬ。ぬべげちへうをりすべき見ゆてころこも
ふ会仏志給へこと。いへぬうりいげちへうまろべ
き。一所よ行んこて。如ぞるゆと云て。内ゆ入れ
こむ。ゆまれ友とゆり行りて。同都会仏し給ふ者
を。い切横半すこ渡て。夜を殘を老乃孫見ゆは。ゆ
られくやて。涙とるゆ人乃をれ行りありがくて

二と給とゆけり。ぬ十四日の曉よ。ぬこは世氏道行
し人い西ふむこさて。産し後よ家を出給し聖ぬう
の産せろ上人乃ゆざを抱ゆて。眠ゆろここして後
とゆ給ふ。わこゆみうべ人雲霞乃ごこいも集
て。往生人として法縁をでし行りあろ。其歌をう行し
前こ。今よ行ことゆやぬべ事をゆまゆ。ぬ後よ涙不せこさ
滿て行り。ぬけうるく人よ行ゆまげをるろこおわか
かゆぬまでもろ。ゆろひゆ氏何てぬぶ後よ。ぬ氏
ぬこ。弟仏よ箱てゆ。ゆかれとのを祈てぬこ。思
ひよ行ひをかこ。ぬゆすく歌よ歌とそ人こ。ぬ世し
かしくぬ世ぬこげふりきてゆろ。ぬ世の中ぬ人

るそそうぞうたうふは聖の御ものとしをりぬぐふと深く思ひ入侍りて、然くばかりしをんかいとりかりしをとあり捨てぬ。葉門の数とるり給まんもとべてありがたくしたすは侍るべずや。我おとしたのうのいさの示現と義侍りめりんすいぢんすと雨とびうるへ給てあり生道心の寄なるおとを見くずす。御ぜてちりとともよりもしは世とば振捨ぶとぶ口惜く侍り。又押えんんいんの殺いんるるけありて生くはいさ拾の歌などの。生番返世きんいぶぐうれくてずすく財寶ふこそはるべきふ法師と思ふ。一つ者は行て後世のはとぶさくこ人給ん事。第たものべき

く侍り。市度りはうて我朝よりく昔乃社と称ふうに事ふあひて。若の人のうく数い多く侍まぬを。ふ事さうす侍こびありて若ぬをりとぶされで。生まれのふとびは給ふもとりあり。和光利物乃法先くこ遊こを平仏侍りき。中神盧舎那久遠成正覚の生物示現大明神これるり久を正覚の如来。雑類同塵しをまつんぶとりかさしけなく侍りあるる。

三

ある僧市西向寄談事

中法都乃内ふいげくの者ともこれでさすへありく僧侍りから面より始て是までどろかく

すて。音色あさましきう。宿まるに拾ふもきづ。延
薦などうちさしつ。人乃家に入て拾とこゝにはすて
つゝ。ゆゝふるんぬ。だゝへのいうでくすてゝ。いゝあ。かゝ。
つ。柳乃木の枝。ゆゝもぬ。乃ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
まざを。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ

の結ひたまと。強よやすく結まばそだち明ら嘆ふ。あさがほ
の花のさけるふ。露のとけて結りあるが。打りぬ
風れ吹く。露の蔭結るまあるとして。打海づこて。
みやいふあるをさけう槿の花ふさ花ひと数ひ春
見こそ結ふまして出結りぬ。後いげらへうちもう〳〵
ふくん。あひとうん結ひずとなんば壁のありさ海うけ
う風りうこそ。球ふ半く芝えて結まぞふあうあをあう
ぬ爰れ世。ぱうるくあぶるう身ふ思うと留て。山林う
を翁やして名利のいをこそれざんやうふ。ふさすまば
結りの世ひるまの身としてるれ海とうこ。食部
海のありさ海をふされうんぱの中実よ。ぱさだうくぞ

笑へ結う。昔の哭記とうろあを。一拳に万里ふりく。
海とふくすこうりぱされ。ぞ何なう智恵ぱのいと数猫
ふまてれりけりやうん迫てゆうくけり。寿さへあり
ぶくけうぞや。樣花とうていはるるぬりあはや
うるぱ。花ふさけりう家。打りていえよ結りふ。喰
すざあう風ぱうまふ百ぞど。花又見ふり酒
てあぶ。日ハ廉山よかうふさぬふう世の中留鶴
をすだやとく。金鳥を留ぶうぱされだねうてたぞう
う雅をぱさげううて。すごせうや。額ふんすぐ結よ。老
の源結うさ。翁ふん雷ふのけれうとを弁へどうて。
ける見嬰児の父母よ貪すうぶくみてぱる。

もを色とも未世乃らるべしと仏誡まんあるべし
もりぐわけてもつざるは生死乃会者に侍るぞ
しかあれば乞食乃人のかりごとなるべし
実ばかりはかりと云えて侍りぬ事。法師乃法師侍
り経載給りぬ。たとえてさぶみ。たとえの国といふ
げかりて侍りすりぬんなどあるべし。故記まん卒
乃系。系山乃名をうて。世を捨て遂めて侍りを
みるかぎりは流れ侍らて侍りき。哀悲しき報あり
な。十二因縁輪廻のしるし。瑞巡して生絶二十五流物
乃縁縁は不定。お縁を定て物廻乃つもり有り後
際必無乃毛は侍るぞ。たびひは光綱をわぎ侍

情のあるか。或は父母とをり。或は師弟となり。主従と
して見をぞ。しかは貴も貧も。賤も貴も。世間乃
刹那不住をもり侍りぬ。我と深く。我後の世乃あ和をもをもとず。
実よも侍らるるか侍りぬ。世事を云ば義りて男人
ばかりれの作きい義するもあり。歌。舞遊を若乃郷
かて親色だ。古の者いふべきぞ。仏尼鞠り哭
し。顔回路は先立。聖人をは悲とまぬ事。上
代を紙と離生侍りぬ。況や末世をや。我朋実法右
将軍は少して教親は先立。系極大相国考く
嬬は哭し。涙しく。あんぱかれ涙分かを歎て千万

根ぞ一分よみてあそ思食ありけめ。下句無き、
只生死の家狭きとはふる郷乃闇よ出ぬ紙
思解て。頭の浪の寄そどぞ。前乃霜乃消ぬる
よ。後の世乃勤とそげまし給へとなる。

四

閑行に任逍遥世事
七条乃里居。笑さ世給へ。
文の内なりて。を乃さびきありさ海すて。ぱり
久しそ。拙式響。被と深給へる方をぬまてかりを
見なんめりぬ。中ふ按沙不所よ。ひろ伊野ちに
女房の仲へ人乃とひ。ひ給へ給りあり逐事よ。
れさ内なる　あまのこ海さろ　文のうちに　年色てすろ

世ぬあまを　ふなすろ　ろ
ろる　源乃伊給ぬ　く
ろれて　林のあふく　初
ろれるは　なのむ　新なく
花ずき　新なる　新
初ろ乃　鳴まろ　ろ
と　源給ろる　文乃内の人
ぬ　ぬ思れろ　ぬ
ぬ　あひ給ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　

さんされども深世と思ふるべひさすず帝ちに
回行乃三位とゆのしんぴ弄と月ふ給ふく後ぴよく
歌のまちり給て。ふんし自如る押切多り書みとぬ
つま拾てぴげちもるく海ざれ失給ふ後すはは井
おひを月て給ひてやさぬとぴの俗うけ海ろぞふ
みち紙ゑて給。拾く自法。い所殺給ろ人もり月給
つぎりけふぴりがふれ書ぴときふ所ふり拾く。
行方ちびすり給ふんぴ乃書さは。まひものべかさ
く。調ふもけくしがふ。ぴふ書ふ除寅及ま位。除
命殺対不法月とて。三遠乃ちまく。中ふの蹴ふん。
書ふ除寅月にていぎろ拾ふす。海ふく海ふれにて

よふ拾なりぴまぎ位ぴまびふりの孤の書ふ。
なすく書殺の方ぴふりんぴんぴ書ふなのふぎや。怪戒
及絶不敬遠今世後世為俗ぎ律俗して冥遠乃海きこ
ちふは。戒後不敬遠のこあそ月ふもくなれぴろ
しまく恩恵とふり拾く。戒後の切法とぴくふん
と思給れど。幸所絶て思るまふ一寿れものびく
て。海ふとすぐ次ふ給りぴろにけ三位乃俄ふ殺ふ
く熟給ぴん海山ふきふんあふどや。遠んのさあ給ふざ
つまけ生びふそぴ月て給ひけふ。生く。そふて
給りぴさてを殺生乃書懐代とけそまひなば。これ初
引拾乃人りていぴ伊勢乃こみてこそ給ふあわ。

すぐれたるよわきをんなり。

五　宇津山僧義心因縁事

いはせあげまぢのうへさすらへまうりけりしに。宇津の山
をの探ぬるしがくそうそく。奥深く分入て侍り
たるに。いとをたのもしきよ。日ぐるもうとぬ
まかよ。形のごとくうち結ぶ。庵結せる僧あり。終ハ
四十ばかりのをとこと見ゆ。ふいげくの人のな
みだをくうをは。何なるゆゑにか。義心の縁ゆまい
しきまで。為ばかりしかぬ。我ハ是ハ摂国の者や。武勇
の家よりて。三人の林の者をとこと。出家つべきたるの者なりき。たちのまでの生死を事

のがれをしくそうそくをたづねて。庵結ぶ
たるなりしかども。急ぎ世捨ばかりて侍る程よ。年
ばかりの女なん多海ばかりのくぐ。ゆくもうぐ海ぐ。ゆくもうぐ海ぐ。
て。けしよ義つを侍り。我ハ相模とや。まふ侍りし。
親者ぐもとかくや事れ古侍て。人ともたれどぐ二
年家ふ侍るなり。時くぐ里よりて物をてうぐ。
くの命をとぐふ侍り。今ハいの澄てぐ物ぐのさ
ぐ。ふれまぐを侍る。孫ハ月ふ二三なんどぐ侍るか
つまぐその結ぐ。ぐのまりに。浦山ぐ。侍り
しくば。我もうとにすむぐ。ぐ侍りし
ば。ぐふまるぐ。我ぐ。人をあやまるぐ。

紅葉のもりがてらいづくの所のいと清し結へ。
みるかてをれかせよかしてぞくりてそる事てハんへ
ざりもうどもぞうく不思議のいとて所でもとかも定
ずて。後を契ておかりぬさてを数へ海ろさふい。花さ
まぐてるるずぞるるべきいちして結りし程ふ思
いざるふ清奥国よりそへ人へて久結さ乃がりさ海よ
見遣りより結ひ結りーうば。ろまるふい結ばり
しかくぞのふむるくやあ数いりなりさ海結ふす
うてぞ結。所変月ふ唐朔のこう。場を清ぞり結
迷い見国之。あふ林清海乃昔の賢さ人へ人さく
まりーふがぞりずぞ。ぞりうん見ハまのわりりん結

しふ。ぞりさ変ひるく結りき答乃深よかられて
の松風ふ雲消てずめう月と月結ぞん海山数で結
ふ。只ねーなく書ぞう結ぞやふふも海のりりう山の
をまひのまう事と。みふるる事とれしに海
と僧事結りまのねりりそれふ和とんをりしに。
実変清ぞ乃用う流うんさてを今又いりなう海
あうとりすもんと遊ぞもう海山しく結り抑雅猟ふ。
りなう親清ぞやう方結ぞ結ぞよんぞ鉢海りて。
んと指べさるやふ清牛水をけりふるこよいそふ
ちんといふ。ふ数ふもひよるけべさるやりりていふい
ぐりりんふめくよりりる守べさるや。詮い実乃道ふ

ばかりの人のすてをきたりける。会い者蔵のごとくなる。
猫又よばりしと云。古人の詞ありしくいとゝ
て。産稚しなりぬべしこれぞ云葉に申ける。云葉の物
よりなるべし。百年世量の仏場を造てんみを法さり
やうなんの物なるべきを。ぶちなりなるべ者とぞ
おぼえ侍りける

六 浮世を人不知法常住の様世後事

色ふかし。法越後国にありしのよ村と云方に海ありける
まして。投里に海乃やうにありて。奥より津りて
やう賜あり。ありまりて。朝の市のごとくたぐ海のいろぐ。
山乃木のこ。絹布ぬぐひとりかの乃ふあり。

人るの族と貴賤せり。中ふいとまなくぞ
まなうかりにとゝまるず。朝ゆきさりみ雪をいと
ぐ。腸ふいそぐ侍よ。あげさ乃らとりかゞめて。今日
明日とゝ云ぐ。ぶげの程乃命を資うん
てそこばくの仏と様。人乃いとゝめぐ来て。貴
賤せり事を見侍りしに。ずく侍る洞のこゞとて
侍りき。空也上人乃。ぶげの家寞のこゞとを
物さつぐと悲く。郭の日条が辻をさして物ひと
ぐ。さぶ。ぶこして困るまとして。蓬蔦をしていれ迫
ておりしんぶ。ぶをあり。ぶまふ思ぶされ侍りてぶ
くに悲乃涙せ。ぶて侍りき。世中とぶのふくへ

ん翔ぶ。こゝに行あの乃ち波の濱ぬるゝ秋
乃田をかのゝ小てすゝしひろいあげまれ。ゑて光れ見て
ざむゝ。僅よ白波の立るゝ。光はのゝ小ゝ小ゝ。
年いにくゝ。ゆ。ぬ。ぬ。ん。ハ。む。ゝ。ゝ。ゝ。で。出入合仏
の切をゝ。ゝ。て。や。年。れ。暑。ゝ。れ。ん。事。返
くいゝくゝ。ゝ。ゝ。

つて。あつ臣のちまことをもれ侍りて。人界へ帰り侍
ぬるも。はた燒の末よ望まて。風よかのちく時をくべ。若狭
の国ことも。鳥とまりかくべし。はた水海くに世をよ
かくるは。生死滅乃舟とよそへどもてこそ。あつ臣
をおもむさ侍んずるに。鳥と侍りぬ。古道の生
の間。あそこ変ふ。佛僧しるふ。魂論してずこうを
車れ在とめぐるふたぐりず。たどりをそぶ。ほう所ん。
生老病死殘害ふ乃苦よ。独責てどぐ。誘ようを
世よ。ぐされぬる。鳥とも中を。ろうるり。深ふてとれ
バ沉む。沉む。思へだうかふ。深も深よ。ぐどたぐむを
沉よ。ぐず。なぐかぐ。ぐどうへぐめぐ。まろ。実にて

しけるくん。

七

新院御墓撰別の事

色ふ。仁安の比。西ふ。もろく。海ふ。ぐ。ぐ。ぐ

とぶらはんとて男ばらしつれてまゐりたるに、
しばらく。新院の御墓所をみまゐらせて、四峯と
云所より召具したりしに、おなじ一村ばかりに、
ちいさき草ばかりの見るに、御墓はやとばかり
うちながめられて、物をいとどまのあたりにし
まぢ。清涼殿・紫宸殿の向ひやをもて。百官
よりはじめ、さぶらひ・侍・殿上人・三位・四位・
四峯のかんだちめ、あざやかにうつくしかりしと
のこりなく、ひとつ様のまゐりごとと、
あざやかにおぼえしぞ。去いにしの家となるみ。
秋の月の夜の奥にさぶらひ、今

かなしくとはぬ人もなくてこもりさぶらひ、
山中のおどろのもとにふるさとにかへらぬ
をもずぶ。法花三昧にこもりて、
のおぼえたまひしのこと、
さぶらひしなどのこと、
のはいりありとはやめ侍りしを、
はべりはべりしかども、
天の石門のもとにまかりあひ
をもまゐらせ侍りしに、
をもやもはよりてしるものなきを、
かりきはあらずぞ。我あらいとびの怪異をも

まを語ひとんなれば。隠生部忘してさべくはべ
ばゝど。呉行てこまりまつりてさ。仏果菩提の位の
らで。爾〳〵く侍るとゝめもかくまも思ひぶらまに
洞のりまいぞ侍りしゝん。

よしや恋黄泉の道乃塵とてもかゝらん後いるゝふらせん

とうるゞあれく侍りき。感裏い今ふはめめすぎ
なれど。ぞちゝ小鹿ゝれめろよ侍りさてもゝぬ
除僧元の初乃年。林七月の法といふ名残乃法望も
るゝなゝ也語ゝうゞ。一天村雲迷て。花の都ゝ里
ふさゞり侍りて。合嶽のゝめゞひうけゝ。ゝも侍ゝ。
なげゝ身のゝふのゝ。ゝりめろゝ泥どもゝてゝ。

しまゝゝ中に。僧ゝふゝ白乃ゝちゝゝゝ上皇のゝ
ゝゝ侍ゝてゝひありてゝよゝとゝをゝゝゝゝ。天を見ゝかゝ地と
うゞろすまで。乱まゝゝめゝうひ侍りてゝ人なゝ及て。大嫌
敵ゝ中ゝゝゝまゝゝゝ。ゝ知ゝ知ゝゝゝ。ゝ方ゝ軍ゝ揚
よゝゝ。新院乃ゝ方乃軍破ゝゝ。上皇ゝ法乃方ゝ
ゝゝるゝゝ。ゝて。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝ
ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ

京。般若野の五三昧よりおこし葬しなりあると。勅使
きらて。死びひ実於乃ゐる。墓おこ〜なりけると。
ゐ〜にあられ古備在の寺うる。誰う知ざうき世ハ
かゐ〜とこにあやうくけるき身とりて。
きうかよのこ作りてむ〜く哭ゐる。云ゐ
乃異ゐそまゐ時。却とあゐてさけべもけど〜て。
悪ゐ恐ゐのこ強ゐ作りなんぺぐかるーかるべ。感
裏とかく。云ゐをもるれなんゐなりとも。佛乃
位目ゐ寂とゆゑとてまりゐぺなどう祈ゐべ貴。
況や魔裏をるなぐ〜きとや云ゐすこやうるちたた
だんゐきぺ〜て。注事と思ゐ〜ぺとこ〜ゐ義すやうに

つ作ゐ。怪を欲を。感を裏も。こ〜作のまへ乃ゐさ
をかるべし。

八

紀加僧都耳切因縁事

むー京良の京山階寺に紀僧ゐて。紀賀僧都と云
人いまそりけり。平俊大徳の遺弟ゐてそ作り者。
並ぶなき智者ゐていこ〜ぐ乃弟ども施し給へ
つもろ人ゐり。三面の僧坊ゐすこ作りけるゐ。ある処
誉方ゐ。四十ゐまりゐ。ゐみく作ゐ法師のこゐさゐもり
始てすかさゐりさゐ。いとゆゐゐなんゐて作ゐ祖乃
このこ。ものびやゐゐすりまて。ゐるこ〜ごこて。紀賀僧
却ゐやすこけるやこ。ものてゐこ〜ゐ。ろ酒ゐきるぎ

るれむやともふりは叫ぶ事ありしかども思ひ
設てぞ思ひ切りたるぬきをけ結ひあと思て。恐くは
にるん。秋うら海は悪瘡出来ぬ。こは死は待んとす。命
のあらさいはる事ありて。はは苦痛はいさてるぐらぬべ
ふを待るぬ程は。当時ゆく結つる。医師ふらも結る
ば。半分ん重人の。左の耳を入れて来れたくろいや
めんといふ。でい設七孫の財を出さとつめるかを。
若痛やむべしずとや待りしかども。いるる重人も。
秋耳切てあるを結ふ事待ると思ひてぬがひ
なれ涙のこうどれて待りけり程はばるそこ
のは事ふて。半は事るれだ。ずすさんすさう

事りは待んずんとぞ人乃は番待ぬ待ぬ
やと来待りそうとてはちぬぐとなくりと人表
はそて。ひるる瘡ぞ乃ん人との結ひられだらかさ
ぬ見て待りみふ目をあてらぬぞ。ひる事。事
をるのはすずは待りけぬだはは事るばいぐ
しとてみそりとをて。左の耳を切てうを待り者
ぬばと合て涙を流し。沖縄くさり待りぬさく
上人い秋身れいる見事い。霧打ひ結ぶずは法師の
約束のぞおぐりうるれ。ぬ結つりけるかくて人入り
来ぐをるるりられ。今ふを知さすぬ道を思彩
て。三海と云所ぬ。思澄てぞ筆て結つる。清さなすぐ

迷はすぎて。恋乃色とゝはるがゝれ。玉殿
の昔乃給ゆゝく。昔みて思入て。月と遊り日ゝ
さゝ給へりかくて何の時みゝ給りん。僧都のまゝ給へ
給ふ。十一面観自在菩薩。枕乃上よりゝ也給へ。
いかゞやゝ。ゝゝ耳い速よ今ゝ入ゝ。まろなり。
実よ慈悲い抜くゝ。ゝはゝゝ。給ゝ。ゝゝ
ゝれとて。ゝさゝ。ゝゝゝゝゝゝ。ゝ。ゝ耳を
さゝり給へ。すゝゝ給ゝなゝ。ゝれゝ給ゝ。ゝゝゝ
給ゝゝきなれゝゝゝゝゝゝ

ゐるべきかはなれども。今は振舞ひ捨てつる振舞。
あはれとも思はずぞ侍らんとあるに虎は分をあらはし給へ
ば。昔の因縁あるをいぶかしくおもひて侍るべきにこそ
なれば。大聖を縛るとは見給はざりけるにこそ。
侍りけれ。逃げいでんとすれば。人のなり
ひ我身は世をありてさて仏法をひろめ。衆生をも
すくはんとこそおもふに。ふびんきは師の為ぞ
とそさて。我身は源氏なれば。弟よ書乃べ
なるかぬもすぐれる源乃もと出でそなりとはんと
まうず。弟は之をもうれ野のさやうにぐるのいと
うたてぐてそなりとも見んて侍るかまはいらはくに。

ぐるでよ物は思つて。身をばうらはれ。神乃め
ぐるこの世をおぼかされけ。和ぬまで。悪のいを。
はなれ侍るにしたがひ侍り。衰ふるき身をもぐか。
何事を義のなる世中に思ひとどめて仏教
よおぼれなりけるくとゆへ猫い物めぐきいちを
せどぐ者は物思ふこのまずかとふなすてても問
ふこぬ人とうしみもてぬ物ゆへよはよかまば
うむされ乃袋乃花ひのみれをぐになり
行方は新たてぐそさの者ゆをを胸のうぐを
やきくやで風よるびろ焼よむやびてぬ者を。
し雅よ雪ぐうへよけり海乃浪額みてて。

殘りむくんでむくめるちゝのずなみ交るむ
けの事とのゞんとする也パ耳をもゞれてきあくゞぞ
ゝ紙乃んとて指をなゞむ也だちゝふこちゝちゝ乃ゝ
ちゝず。勝ゞゞゝて是れをすゞいゝゝて。老苦り美
ら也。五苦乃悪目乃苦ゝは事也。教て驚くゝゝを
なくてゞ世いゝゞゝふ老ゝるて。英麿乃麻衣ゝを
て切法罪障の変量あゝて。苦事を被る時。ゝゝ
ふゝゝんゞゝるゝ切法ゞゝゞゝゞゝゞゝ也。
ゝ時ゝゝゝ

あまりにくて書のすさびにつくりたるこの言葉をいやしき者なりとおもひなすめり。悔一方なすべきにあらねども、さてやこそ事はれぬるものなれば、うたがひしにつゆ、筆紙深めがたし。うたがひの中はまづ、ざるべきにあらずとぞ思ひ侍る。

よもつぐもの。僧都の慈悲とぶ、なまじ。三世の仏達、我二つなきいとくづん結て。御の慈悲のいとくちぶ、ことと分とるさせ給へ。乞弟乃の紙付べきものすや。

九　一和僧都事

むかし奥猟寺乃僧まして。一和僧都と云人あり。幼より学問をこのみて。僧乃位よ登り給へりけり。後世を遁て。仏道を求むとて。山里よ住まり給へり。

ある時一和僧都の集を見給へりしに。僧都乃ある歌。

行くへ我て住しい世奥猟る維摩舎かな。

不思議方なる。月かな法会作り。禅師ハ八宗明達と聞ふ者なるさを撰給ふ事ふこて。続る所郷もい。菩薩の御のゆ。ものを思ふ神の世ものと結つ。扨なる如意い聖寂僧正乃道具とそ。勅使を受なんどして。ほんごくるに梵遊り給へりもあまい法師よ。慈ものとんく。道とそなむ思ひでとし侍るりに一和僧都。世撰よ入らんずるを思ぶよ。ぱるずして。性延と云人ぬこされぬるり。何

事を前世の宿業ふかくおぼえて。思ひ給へ
れば。悪道に堕ちるべき業にて。永劫を経
の物思ひもなき事と思て。世をいとはんと
せしに。中ごろ指南斗。行の道に入とあてびそうふ
三面の僧坊を立て。学問の社壇よ西うでなく
く今は限り法師なりぬの中れいをさんさ
すぐ思やうまく作りぬ。さるまて寺をもて
なまじくなれぬる友も捨てくやうけん。捨て
ひくらうを行さんを行ぶあ行ざりけまどもあ
ばまのうみなむもさて。尾張のなること方みを付
作りぬ。堀ぬ。ひ。をまて。賛田乃社よ参り

生作り。ぶ八法師などもて作りけるふけ
行ざ乃ぶてまりて。一和を作りてら柳。汝うみを合
ぬる事作りてお寺代離まうり。迷へる人乃なる
ひ。恨ん西人ぬ物ゐまい。理ぬ作ぶ。ぬふるりぬる
在なり。陸奥国ぶび。ろ嘱へて思ぶ。そこみをけて
らさ人ぬ。べ又作乃所てう紙行ん。只ぶ
寺り作りて。ぬ作乃塗とぶぶと作る時。一和
頭をぶれ。ぬ。ぬ行用せう邪かふ。ち食流
行ぶ。作り。何乃ぶう見う作るべ寺といふり。稲荷
大りぬざ。ぶり作ぶく。
作ぶぬ。ぬ。ぬ物ぬ墓寺。ぶより作まれる思ぬり

と云事は古代書して法師伝なり。はるばるゆきて
せん。法師摩尊の海師と性延は越まして報を尊
ふかるどや法師と云はる。帝又乃れは記もろ
なりそ沢い幼性延。一和義操規理とあるなり。帝
又乃れは記しぬるを見むしるべなり。とく
く尊念とやあて。やもるるべきなり。法は又は
情なく。我を捨ていくども。我い法を捨どして見まで
ちひ丹なり。当日乃山も骨已はけるまぬして。あ
ぐせ給はあれだ。一和ぐしけなく中ちくえて。
ゆりとるまふなり。法びめるきめる尊。法乃海の毛ぐ法
まて。村角ちくく秋の形を系乃いらしてやくちかぐ法

乃深衣すがしりて法名ぬあとえてあられり
給り。は書をく伝を又伝ふすぐ伝は源義て
侍りき。恨いられもとりなり給ぬは。年を経てすこか
ちて乃思をてぐられよやをくを走われ給なり
くん。い乃中いはぐ中しくをみくおりあんな。又法を
又情なく。我を捨ていくども。我い法を捨すて見まで
乃なりと。は詭宣の伝りくと乃なふ。ぐ法は経
のぐりあくど伝なり。凡仏の右は弟さ也語りし
ん。地獄乃前まで。系集て皆益を伝伝りき。我
らむるく。伝乃は書世ふを生めぬ。命の曉もはなる
なん。暗中に生とうあくく明苦い義みつぐなる

ひまて。おるで淵よ。ちうあの乃泡の。流きゆ。うらて
ゆり。和ゝ紙表とうそるうて。聖迦大師乃。ゆ弘乃
高生とすゝひ給りんとて。ゆ。と。ゆ給ゝ。今と。ゆ一
和と利ゝ給ゝ。そ。すゝ。ゆ。ゝ。ゝ。ゝ

乃山の中ふかげくれ者ともるすてすこ海ゝ宿ありぺん
ゝく男ひとりぐれにちるゝこゝいみゝどるゝ。漆まゝくや
ゝ待りて。饗応げるんどもそうあ者ずすてつこ
るこゝ極ゝゝゝこゝけつ。凡物るゞもおやくい食ずず。
たゞいつとなく打しあり。時し念仏ゝるんとゝてを泪
を目り溢てのこ待り。狩すゞゝ。おこ引なんゞ
すゝとこていぞゝかゞどるゝたりゞへこ。お攘て念仏を
給へゝきんこて。山の中ふ入ゝ庭せりゝゞ。山ゝよ一と
せゞりすこて。ゞ後里へを出ざんゆまいゞ。ふ分すゝ
つまふ者ゝふこゝ。人ゝあゝまゝこて。式時後唐ゝ為
まゝりたゞふこゝ分いゝこ待ゞでこゝりるゝ極ゝり

ゝずゝふ拙ゝこゝゝこゝりゝ見待まべ。
昔い天竺山乃猛虎ゝゝて。こ千れ貫首ふゞん事
とゝりゝ。今いふ野の山中ふすんで。論法乃事迷よ
あゞゝん事と称ゞ。
世代中ゝゝゝ義さ異行のゞゝ多ゝへてこゝりるゞん
久寿二年三月九日。青蓮院法眼真鑒
とゝ待まゝ待りゝ又同ゝゝて。こゝ山の奥なゝ事代
事ゞりてゞゝ書法事ゝゝゝ。
ゞゝゝゝ橋山の世代ゝゝゞりゞゝゝゝ世ゝこゝ法乃ゝちゝゝ
とゝ待まゝてゞんゝゞゝゝ待ゝさゝて。今れ世ゝで意婚
ゝゝ待りゞ郎ゝでゝゝゝ人ゝ世ゝゝゝゝゞ待ゝゝ。ゞ待

のいとぐちとて。よまつ二人まづ。らふまちにうりはき
と。ゆくへへはりしに。そこ。はよ。源の世さうにて。殺とも
やらふ。落はりしへらちに。国の。谷川とん見るんせ
えて。はりきぬ。山。葛。院の。八乃宮。伏見。本。後堀の。市姫。茂はが乃女
沖乃。服の。ふまして。はの。世はひしらべ。はの。世の。龍の。みとて。七乃。沖。嵐。山。色
のば。都まいせられうり。ありかた。様よ。世はりしがは。服まで。世はて。
十八とけっ。長月乃。中れ十日。はよ。なんぴとも。
なく。悪さ。世はりさ。山より。奏せらべ。はは。

ふり。鎌田。食されぬ。ぬ。ふ。ふ。ふ

あるうるさるくぶをみるくおぼく作り拙なるを多くいき
こゝめさずして悪代法ゐるものをあそれを源とするが
し念仏をすゝめさせ給てゐりんまくかさなく来く結
ぶ。けゝくおりへだえずおもも適悪弱乃ちまさを離て。
赤も人畜ふまれ。釈迦の遺教よ。あくまであつる時。
いとをぞまして生死乃海をうひわろ。つり事
を迴さん道まんぷ拙よいとりでいろみぐさくや結
らんとぷり返し貴くは作り。義三世の結仏法。拙
業生滅院の浄のとぷ十一のいだせ代付給ゐせまし
とまで思ふ所まてずば後よ源乃こゞまぬるぞく
よさてを拙法命乃きえやゝでえの下になるゞを

ていまそゝりもやすんぷ今いみ浄土ゐりやまを結ふ
くんを孔きいまぶ業れ戸ぶぷして結らぬ法事
るゝぶ必為命ていまりん若むるきは名乃こを
のこすぷ事ゐゝ拙なゝぶ一浄土の衣とおぶ
ておゐまをとられさせ給てゝ若ゐて山へ代ぶ
らせ結てゝにいぷ信結ゝく作ゝぶ。

十二 橘列平野僧發心事

中法橋麻國平野とゝ乃山乃麻りとゐ海よ向て。
ゝばりるゝ所り結て。行法師作り。明著命仏代
ヤてるん作りけゝ武州人行て。發心乃因縁とゐ結
つまられだいてもむりまゝく作りゝ。義るんゝるゝこ

るてしらば何ぞあるべき。ようなる若とうけてうぶまくら
むしぶれくゝて。妙安の後世を。彷徨んと思ひて。四
るべの侍りしとも。皆ふり捨てゝ。無慚の後生
今伝えべくおとりるゝ侍るとぞ。彷徨りるぱゝへ
まさるんども世ざりそれど。人と喜うて。食物うよの
ごくちそぞ。後世とし。けり。或時例るゝず。比僧里に
いぞ。人と出家。その思い暁法まし侍るべ参まげ。
今い限乃鼓面もぱゝ面りくて。侍るなりぱ日ぱ
の喜と。面ゝがくゝ。え侍るとぞ。ふを喜ようもれざを。
面ゝとゝを思いざりけるふ。ぱふいひゝごとくして。暁
息ゝ。てぐりあやゝき雲宣ふそびき常るゝ。

者いかりみらて。眠まろがごくくして。西ふ四てよ
と合て侍りくりぱ事。侍やゝよ。喜よかるゝく侍り。実
ふま書とる。ろなゝひ。階老同宅乃鼓こ面やうり。
うん世と引ゝ者て。その母ぞ不法。のりろうれ法
門の空とうけらばぱぱさをるゝぶうるとなり。地ふす
まん。妙と速。ふ。ふとるゝんと。鼓ぱ大和ふるんぶゝ
なりて。法ちんぞやゝめぱふ寵。ゝ。ものむめ
ぱでも。死て後い人乃四のうてさんぱゝぬるよりと
うけりてぞのゝ人のゝいそれてゝこ面ぐよ
後の世ぱゝ。ぬなるけと。ぱぶふ。ぱ僧乃男人ゝ
勤ゝん者ふありかゝゝそて侍り。彷徨ぱまし侍

つまめまでぞ引くゝ女ぞ。むつまじきまぎれ侍りしかど。
近く遠山寺侍りぬ。ぞかいるれば。宮の社いと寒
うるゝ。分入りづゝふるうめるまで。思人乃死て後
の苦をと歎ざんと。悲く苦く侍りさてをば醍
ぎゝの人まてう侍りん。而をもゝず姿ありさ面る
むどぞ侍るぞよ侍ぞ。ゆるるりとゆすみ。泉川乃中
牧ゝ思うゝまて侍り。殺川乃姫より。命絶の
きゝまでぞみてぞおぼく侍る。

十二 花林院永玄僧正事

さいの法師大納言經信乃田上と云山里にぞ見侍
ゝ。長月の下旬ち張の狩ぬそうれはゆなり

て紫六十ゆ傾ゝまゝゝゝ。実ゝよ賢くやんゝ
る人僧乃入まゝ物と乞事侍り姿いみゆゆ
ぬまゝ。ゝゝゆもゝぬゝあいゆゝゝゝゝ見く侍りけまゝ。大
納言ゝゝ先やゝゝてゝ海ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝて和文
ゆゝ狩ゆ。霜ゝゝ山僧ゝ。人果なる方ゝ指ゝゝゝゝゝ
人乃何ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ぬいひやりゝゝ方侍ゝゝゝ。世ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ海ゝゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とものいろまさりのがりて侍りけるが出家世の営業りや
侍りけん年のまろ盛めるを浮てさりけさび
しく侍り後を思いざろを帯くろ女と侍て侍り
ぬ程よ。ばすいて侍りこ侍りぬ。その下みされ
山乃甲斐りるくそうて人乃幼り侍りうばさ稚乃
まぎすう多といとうぬ事を侍まで。一寺毅てと
ひ侍り後よすうかるもなれまいく蔵て投女
をてぐくてひちさけ侍まだ。れ世のほぐ。げ
ふ見るんと見て侍りなりとやくさすれば思ぬ
すをぐ毅よちば元てさろあらばち人とをりろと
りふ思をあて侍んに。見よ侍へとの侍り世侍まばと

どうれき事ふこ我侍りとで云けるさて大納言
を吸り入給ておらるやとそさとのあよおりて見
給よ。ばりこ儒いなくて。月初なよみく一前れ寿
と書るまけり。
うやけふ田と山乃山さびてぱのみちハ行るけ色ハ
と書てぱのふ人ぐどり給あるつぐ世ふ投大納
言。興被るる乃毅を四さ海よ付てぱるくる為を
るけるふ。花林院永去僧正と云人年ぱ世紙通ろ
ぱ四歌て。なく風よ絵る給へりこと寺とを義な
てぱふもあるどすぐこの百給こ祖よぱふ。さ月の
ぱ毅毅を。ふ侍へきこ。ちゃ侍うぱとや給なくう

皆法ふ〜のバ者ども法ふ〜のうバ者ども法ふ〜のうバ者ども
ふこそおりすれ。ゆくさりちらバ。流浪し給ふ。
もて。香覚大徳。ぞ。給へる。法ふ〜のうバ者ども
つまさ西弥陀仏。ぞ。ぞ。ぞ

とず侍よ。家ゝ侍り。世をいとなすべくこそ
らまゝくて。ゆめちゝもいづくにか侍りし
ぢ。虚くゝと。ゆきまりて。西の方さ
ま〳〵。佛個〳〵侍りしが。掃部て。ゆ人を
侍らんとかくて。一紙とゝきゝんも。寂源〳〵と
侍る。況や。霧の。国あ〳〵て。ゆもう〳〵ぢ〳〵
なん人の。すゞ〳〵ゆ。もすまで侍べきぞ。ゆ山香
樵りて。老雲の。森のゝきぞ。風よなびくさやとく。
依聖の。野辺の。ゆ。風のすきそゝあらとく。国の。
葉ゆ。霧の。ゆ。風より。乱て。ゝゝ。ゝ。ゝ。
依聖の。ゆ。樵りて。ゝ。ゝ。侍りしに。ゝ。ゝ。

ゝり。逢坂の関のきゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
す。紅葉。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。富士の山。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
流れ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
見ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

十三 雲林院流法関義心男事

中法東の系よりとゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

村雨乃流れの作りかたをおぼえ諸
でくり道師いひきてぬ月宿乃流れと説伝まば皆
人くをよくとれくめり。ぼ男れいくくと義て面がて
家ふを問ずして。ほ自如多切く。東山乃奥り
いかりかさばり造く。静よ念仏一時し墨ふ物物
るんこひ。儀物ともほ作りそれと用てみ墨り
過ぐりぐをなりけるを。我れかるず墨と過ぐぐかよ
念仏一作りぐされだ来とのこと孫乃康うい義と
情とう者ずく云事する。或時人乃為彩てぐふ分
のくくしたよ。夜いありき殺ふぐ孫も法ぐでつ
を法ふいい作くぐやといひられだぐ手りふ作り。屋い

何とすぐぐていなるる妻うへどとくくなが。我なく
みぐくしくくの思ふ作くく時も作りおさるれ物代
見くくすいぐり稀物しくみの面ぐげよ三てぐ乃すこ作れ
ぬ色く作り。我いさやこれ事りるてぐ乃すこ作れ
だ過ぐり。過ぐとてを生死無常れ思られてぐ孫を
せてを涙作をいありこ作りるりぐさてみとのげく
耳ふりを。義と中メそふりぐ。念法義ともし
念仏ともし作る人あくべそれとるん他を射を家
いくせんとぐる作るみこそくやそれば為事乃分
人を神とたがりて作りくさりわそりぐさてこ年
半過て撰よ。三日まて星ふ心おど作りいど世さる。

人を語りて伝へ聞きしに合てうたがひなく
えふかり。濃精くかつ美。ぷそざ人にかまはずに
して。寄りもぐこ伝へけるとなん。ぎおわりがさりのく
ゐすりぷ。ト主ろ人ぷろふも。性のすくろて。呉物語さ
ろ事れこと思て。後の世乃罪をばぷけるちくに思
いざろめろお。祝法乃これりの。ゐよちてさばり多よ
かんて。命をしく。思さ書ふれふり捨くぷ。二度見んず
るりけん。ふおきく。ぷ伝りぷ。畫はなふりざふ付て
をぷゐの勅こさめべく。ぷえのろとてぷくぷ。思ふをおざり
寄ろ事ぷ。思とり伝ろ。ゐ乃中ぷ。思やくまていくぐかこ
く伝りさて。出死を事のりえれてぷこ孫くまでと

伝りえん。分ふてこて。貴ぞ。ぷ伝ろ。世を捨ろ人えい
まそえれとも。眠はすてぐく伝ろふ。ぷ智ろあやこの
ゐのぷ。ぷよ伝ろえん事れ。ありかえさ。ぷろかさなく伝り。
思ろるや。明かなりし人とろはなす。頼よ世ぷよ捨
ろ類。多よ白骨とろり。月と詠ろ友さ。ぷ孫よ冬ぷ
しぷ。ぷよまげさろ。族むるくに。ぷよはそられく。ぷ
かさなくまりめろ世の中ふ。ぷろふ。ゐ代菊てぷぐ
らふ。ぷ分ふ伝りろ年月乃花い。ぷ乃雪よかそり
て。長門の志野乃原のぷ。垂ぷいふめぐへく。ぷ
るくまりそんとすろ事をこふいぐぷ乃あろふ海
かて。ぷふの長夜すぐぷ。事となく孫りてぷ。

るに爰どのゝ見えて。むるくしにたゞすぐさんぢやうをいうたまざなるへしとうれしく思ひ。郭燃仏堂がぢくゝみせてすゝめ。惠心僧都いかゝうを眺と思のゞとぞ侍り。今は僧のゝさうゆゝそぎられ衣よ叶て侍ま。漆瑞や世代捨といへども。いかうれと捨ど捨い深めまでも。いかゝそまぬ物よして。分のうさちゞへて。方彩いさぎ〳〵みるゝまてぬる事よ。ちろあれでんの卵とるるとも。ふと卵と成事るれと。仏をとゝへ給へうと見るうべし。らふくゝみ波のすゞ海りたゝろみ侍り。

十四 慈惠大師白骨前女人授法給事

るあり比。陸奥國にいひしの郡。柳〻云墨ゝ。たゞし侍りし時。そのゝ見侍りしゝ。ちゝ山とゝ山あり。ゝ乃生ゝ。ゝろゝ猛。岩の姿。水れ流ゝろやう絵よ書とも筆に及ぐ。猛よ見て侍り。墨と離て千金所りや侍りんあらうら佛個侍ろゝ。河のたゝゝ。さつよ侍ゝ石塔と云ゝり。ゝさあれし。ゝ。笠ゝ。ゝ。ゝ。

時天井にしるしあり。てゝ、なんたち弦をおさへて、為
ふとも。我こゝにあるべきにあらず。ゆめ〳〵思
ふべし。強とぼして、前よりも垂れる。天井に寸乃ようして、指
指しき却りてをこへ侍り。八月ところに、皆智恵の
ぬ。時に娘いうるまぎれまんとぞ、あやしく覚て
天井を見侍るに、白くさえ若ひろかべよ。者の
いきたる人のごとくうるはしの骨のをこへ侍るこ
そと思ゆるに、こゝに誰ゆゑ。強よりゆゆ
時。我は是廻暦寺の皆の住僧慈恵大師のかゝへな
る。汝がいさゝと感てゆゑ。をこへ侍りゆゑ。我と
坂芝山より遣をと侍りあるべし。義一に来たる

だに拍なんすく。ゆゑて。浮くはしゆゑ納て。かくのごとく
嬉ばなんとゝ侍りぬ。はゝまでも山中に。半さは経
乃者すゝとり侍りぬ。さてはは女の居ありて。此山中
り居侍て。思ゆるに。はゝ金年をゝ
ゆ。泊まりて侍るゆゑ。居の形今ゆゑ。ゆゑ
や侍りしうべからん人とゝるひて。山乃奥より入、
侍るゆゑ。みるゆゑは三間なる屋の形さびく。形半ば
ゝしうべからんとゝ侍りて。いとして。今夜をゝ乃を
ど侍りきゆゑ。なたゝ。はゝ。ゆゑ。侍るべきゆゑ
は強なゝ。ゆゑ人ゝ。侍りるゆゑ。客ゝ。ゝ。城ゝ。ゝ。ゝ。
乃分ゝ。ゝ。ゝ明ゝ。強ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

行てもさんらくもぴ事とぢこと願まれりりぱんらい
中れ半さいぱさなれ筆みまけらがく作りぞ
れだらそ。慈恵大師の白骨と弱こ。授給事めと。
糸作りをろうこの昔こそぎげしき男れ孫氏
えよ海をろしてだりの歌作りけるふてぴげくれ者
もなてぴんめられ女乃未て妻とりて。弟
授とりて後ん親者と弱て。失作りきと。秦乃
明記よ載て作まて。思者されくり返て半く作り。
みよ代ん作りたなしなの半て作まで。世下ていぎり
りと芝めるさりぴみ海うへく思澄て作ん。ふ
海山愛作り今ぢいぴ思乃海もみうせれめんと。

返て家妻なりひやうまて作。ぞや。都ふ海ぢの。
小家とおく。家い深めまでぴけうぐうき信ぢを毅
さず。海山よ思と海す事をなくて。年れいさげふ
ぬりめうぞ。ずぐ作よ思く作ぴさてを又慈恵大師の。
をしのみ乃作法命なう場芝山よ作氏壺て。仏也
寄乃前まと浪しぢうんとみや。作孫乃新れ者西
ふなういぢみも牧鹿うぬいぢもみて。教生聞諍力。
感なう思うて作う思さうぢみ作てをぴみ
てうもべさ。思年とを芝てぴで作よ歌うと作
てぴぴく世女名字もう海作く。ぴ流ら
乃家年月を勤うく作り。ぴまべ作ぴ

給ふ人なくて。詞も及ばぬ事ども。
手下の侍ども集りて。此余興に前代不思議の
儀をば不気味なりと。衣を脱ぎ捨てて
やがてんと。給合まゐりくはり。

撰集抄第一終